

第16回 世界につながる私たちの地域社会

パナソニック提供龍谷講座 in 大阪
～今、あなたに知ってほしい世界の現実～
2010年度 社会貢献・国際協力入門講座

日時 10月20日(水)午後7時～8時30分
会場 龍谷大学大阪梅田キャンパス研修室
講師 神田 浩史 特定非営利活動法人AM ネット 理事
(<http://am-net.org/>)

講師の神田さんが海外での調査を通じて気付いたことは、「世界と地域との繋がり」、「農山漁村が崩壊し日本社会が危機的状況にある」ことです。東南アジアなどのNGOの仲間に「日本人が支援、サポートしてくれることはありがたいけれど、フィリピン社会のことはフィリピン人が取り組める。しかしフィリピン人は日本社会をどうするかという命題にはなかなか取り組めない。日本人は、まず、日本社会を何とかすることを考えるべきだ」とよく言われました。



悪化する世界の飢餓

一体この世界では何が起きているのでしょうか。今年の世界の飢餓人口は9億2,500万人で、去年は10億6,000万人、一昨年は8億4,000万人でした。実は一昨年以前はほぼ8億人台だったのですが、去年急増し、今年は9億人台まで減りました。しかし、今年是世界中で気候が不規則で穀物の作柄が悪く、来年は飢餓人口が増えるだろうと予想されています。このような状況にあります。世界に食物が足りないわけではありません。億万長者がいる一方で、他方では沢山の人々が貧困に喘いでいるという格差が生じています。67億人の世界中の人々に食物が上手く配分されることが食料の安全保障と言えるでしょう。また水問題は更に深刻です。安全な水を飲むことができない人口は12億人にも上ります。
(WFP 国連世界食糧計画 <http://www.wfp.or.jp/>)

日本が海外の木材を輸入することで現地の暮らしに悪影響が

日本は国土面積の3分の2が森林という世界的にも珍しい森林大国にも関わらず、東南アジアの熱帯材を大量に輸入しています。戦時中森林を伐採し過ぎ木材が不足したという理由で、1961年の南洋材輸入解禁を皮切りに、フィリピンから丸太の大量輸入を開始しました。その後も海外から輸入した方が安いという理由でタイ、マレーシア、インドネシア、パプア・ニューギニア他から熱帯材などを輸入してきました。

日本は温帯林なので、皆伐したままでも広葉樹林が再生されますが、東南アジアの熱帯林は自然蘇生ができません。80年代、日本の企業は、現地やヨーロッパのNGOから東南アジアの森林の皆伐を批判されました。そのため多くの企業は皆伐作業から撤退しましたが、「皆伐」という方法は現地化され、現在も続いています。

インドネシアでは木材はパルプ工場に紙に加工され、わたしたちの社会にやってきます。日本社会ではバージンパルプで作られた紙の方が再生紙より安いです。これは、バージンパルプを使用した紙は生産における環境コストが上乗せされていないから安いのです。つまり、再植林されないということです。

熱帯林が無くなることは、先住民の暮らしを侵害することにも繋がります。インドネシアの先住民は、「森は自分たちにとってスーパーマーケットだ」と言うそうです。所得はないに等しいけれど、森にあるものを活かし安定した暮らしをしている先住民は、森が無くなると都市近郊のスラム街に行き着くことになってしまいます。公用語を話せない彼ら・彼女らにとって就業機会は限られ、これは「開発に伴い新しい貧困が生まれる」典型的な例といえます。また、森林を損なうことは動植物や生態系にも大きな影響が出ます。

わたしたちが木材を東南アジアや世界中から輸入することで、供給地の水環境にも大きな影響を与えます。東南アジアでは雨期にスコールが降ります。その際に裸地だった場合、大洪水が起きます。例えばフィリピンでは毎年台風被害で多くの人々が亡くなっています。フィリピンは、60年代は森林被覆率(国土面積に占める森林の割合)が80%でしたが、現在では30%以下です。もちろん、伐採された全ての木材が日本に来たわけではありませんが、日本で多くの木材が消費されたことは事実です。「単にフィリピンでの台風被害をかわいそうと思うだけでなく、それが起こった原因に目を向けて欲しい」神田さんはそう述べました。

日本は食料輸入大国

日本の食料自給率は先進工業国の中でも最低レベルです。また穀物自給率も26%と各国と比較してもあまりに低い数値です。食料の問題と水の問題は密接に関係しています。ヴァーチャル・ウォーター（仮想投入水：物を移転するということは、生産する際に要した水を移転すること）という考え方によりますと、日本は世界各地から水をかき集めていることとなります。

日本の食卓はアメリカと中国とに大きく依存しており、アメリカの中西部から穀物の約6割を輸入しています。そこでは、行きすぎた地下水灌漑が土壌劣化を引き起こし、もうこれ以上穀物がとれないと言われていています。また、日本の割り箸（その9割）を作るために木材を過剰伐採していた中国の黄河上中流域では、過剰伐採によりもう伐採は禁止されていますが、水問題が深刻です。わたしたちの社会と密接に繋がっている地域が、深刻な森林や水の問題を抱えているのです。

日本でお米が採れなくなると世界で何が起きるか？

1993年、日本ではお米が大不作で、翌年に世界各地から210万トンものお米を輸入しました。日本がタイの高級米を大量に購入した結果、従来タイのお米を購入していたイランが、値上がりのために購入できなくなりました。イランが他の国のお米を買い・・・という繰り返しで、最終的にアフリカ西端の経済小国であるセネガルが飢餓の恐れに陥りました。しかしそのことは日本社会ではまったく問題視されませんでした。「一国の経済状況を何とかしようというだけの短絡的な考えや、新経済戦略として海外にどんどん出て利益を上げればよいという乱雑な議論に対し、非常に危機感を感じる」。神田さんは続けます。「先方の地域社会にどのような影響を与えるか、また疲弊した日本の地域社会のことをもっと考えなければいけないのでは」。

循環型社会形成に向けて

上流域に豊かな森林がある地域は、「水」で困ることは多くありません。森林は「緑のダム」としての役割を担い、保水や水源を涵養する機能を持つからです。つまり森林の有無で水源の状態は随分変わります。

しかし、現在日本では森林は倒壊し、一部では土石流が限界集落に被害を及ぼす事態です。また450万ヘクタールある農地の一割以上は耕作放棄地であり、これが広がると水田の「生産を伴うダム」機能が損なわれ流域の水循環の安定が保証されなくなります。下流域のことを考えるとき、上流や中流ではどうなっているかという視座を持つことが大切です。上流域の林業の再興や耕作放棄地を回復させる営みは、世界との繋がりを考えると大きな国際貢献となります。森林を手入れすることは、森林保全だけでなく地球温暖化の防止にも寄与します。森林とどう付き合っていくかを地域社会で考えていくこと、そのようなことを都市部でいかに伝えていくかが21世紀の日本社会の有り様を決定するだけでなく、世界の環境や貧困問題へ影響するのです。

神田さんは、水の循環が命の源であるという理由から、地域社会を流域単位で捉えています。それは、上流域の森林の様子に想いを馳せる、中流域の水田に関心を持つことに繋がります。そして実際に、農・林・漁業の再興が重要となってきます。グローバルなつながりを考えながら、小さなエコ活動から半歩ずつ進んでいくことが今わたしたちに求められていることなのです。

岐阜県西南部（西濃）地方での取り組み（<http://www.ibigawamizueco.jp/kankyo/index.html>）

神田さんは、現在「ぎふ・エコライフ推進プロジェクト」に取り組んでいます。2006年11月に発足した西濃環境NPOネットワークのプロジェクトとして2007年11月に始まりました。多彩なNPO、住民活動団体のネットワークとしての特徴を活かし、マイバックやマイ箸、マイパックの使用、フェアトレード商品普及の推進などを行っています。